

## I. イントロダクション

### 1. 聖書の全体構造理解の大前提 ※スライド参照

#### (1) ディスペンセーションリズム

定義『神の計画が進展していく過程において出現する明確に区分可能な神の経緯(時代・時代区分)』

①聖書を字義通りに解釈

②『イスラエル』と『教会』という言葉を一貫して区別

③神がユダヤ民族とアブラハム契約を結ばれたこと。

\*それが永遠の契約であることを認める。

④歴史を貫くテーマは「神の栄光」

⑤漸進的啓示の理解も重要

\*神からの啓示は、一時(一挙に)にではなく、漸進的(徐々に)に与えられた。

\*神は、徐々に(歴史と共に)啓示を与え黙示録に至った。

\*創世記から黙示録まで1500年かかった。その完成体が聖書。

\*神の計画の進展とは、神の視点から見たディスペンセーションの移行のこと。

### 2. 神のご計画の全貌について

#### (1) 神のご計画の全貌(全体構造)を再確認 ※チャート参照

①聖書の始まり(創世記1:1)と終わり(黙示録21~22章)があるということ

\*天地創造 → 新天新地、新しいエルサレム、神の栄光、永遠の秩序

②エデンの園の二段階の回復を再確認

\*サタンの墮落前のエデンの園(宝石)以上の回復 → それが新天新地

\*人類の墮落前のエデンの園(緑豊かな)以上の回復 → それが千年王国

\*どの時代も人類はテストに失敗して裁かれるが、恵みは拡大し続けている

③黙示録の学びの範囲の確認

\*十字架の贖いから約65年後のヨハネが見た幻からはじまる。

\*最後は黙示録21~22章であり、聖書のゴールである神の栄光。

#### (2) 終末論の全貌(全体構造)の再確認 ※チャート参照

~黙示録の中心テーマはキリストの再臨(19章)~

①ヨハネが見た事:1章

②今ある事:2~3章(地上の教会について)

③この後に起こる事:4~22章(4~5章は、天の教会について)

\*再臨がクライマックス:19章(中心テーマであり、クライマックス)

\*再臨までのプロセス:4~18章

\*神の栄光がゴール:21~22章

(3) 目次構造の再理解(1章の復習もかねて) ※チャート参照

①1:1「イエスキリストの黙示」

Rev1:1 イエスキリストの黙示。これは、すぐに起こるはずの事をそのしもべたちに示すため、神がキリストにお与えになったものである。そしてキリストは、その御使いを遣わして、これをしもべヨハネにお告げになった。

\*ヨハネの黙示録というが実質的にはキリストの黙示(開示・啓示)である。

\*キリストが教会に宛てた最後のメッセージ(手紙)である。

②1:7「黙示録のテーマ」

Rev1:7 見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。

\*再臨とそのプロセスが黙示録のテーマである。

③1:19「黙示録のアウトライン」

Rev1:19 そこで、あなたの見た事、今ある事、この後に起こる事を書きしるせ。

④ヨハネが見た事:1章

⑤今ある事:2~3章(地上の教会時代について)

⑥この後に起こる事:4~22章(4~5章は、天の普遍的教会について)

\*再臨がクライマックス:19章(中心テーマであり、クライマックス)

\*再臨までのプロセス:4~18章

\*神の栄光がゴール:21~22章

3. 2~3章のポイント:7つの教会の意味:3つの神学的意味 ※チャート参照

(1) 1つ目は、ローマ時代の小アジアにあった実際の7つの地域教会という意味

①地理的つながりがあり、エペソ→ラオデキヤ:→北→南東の半月形の順

(2) 2つ目は、7つの教会とは7つの型(要素)という意味

①紀元1世紀に存在していた7つの教会は、今日の教会の7つの型でもある

②今の教会(賞賛・叱責)だけではなく、個人(奨励・約束)にも適用される

③これは推論(歴史的預言的解釈)である。

(3) 3つ目は、約1930年間と未来を含む教会時代の特徴を預言的に表している意味

①教会時代の流れの順番に、その特徴を持った教会が紹介されている

②各教会の名前も重要な意味を持つ

\*褒め言葉しかない教会 2つ ○

\*褒め言葉と叱責は 4つ ○

\*叱責しかないのは 1つ ×

③これも7つの教会への手紙を学んだ結果出て来る推論(歴史的預言的解釈)

「七つの封印を開く前の天の様子」「天使と24人の長老たちの礼拝」

黙4章

## II. アウトライン **※スライド参照**

### 1. 本日の学びのテーマ

- (1) テーマ 14 「七つの封印を開く前の天の様子」黙4:1~5
- (2) テーマ 15 「天使と24人の長老たちの礼拝」黙4:6~11

### 2. アウトライン

- (1) 招き(1節)
- (2) 天の御座(2~3節)
- (3) 24人の長老たち(4節)
- (4) 7つの御霊(5節)
- (5) 4つの生き物(6~8節)
- (6) 天での礼拝(9~11節)

### 3. 結論

- (1) 褒賞のための裁きとは何か
- (2) 教会の将来の運命を理解し、信じると!

このメッセージは、黙示録4章から学ぼうとするものである。

### Ⅲ. 本論

#### 1. 招き(1節) ※チャート参照

Rev4:1 その後、私は見た。見よ、天に一つの開いた門があった。また先にラツパのような声で私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声が言った。「ここに上れ、この後、必ず起こる事をあなたに示そう。」

(1) ヨハネは、7つの教会への手紙の啓示を開いた後、天の御座の幻を見た。

① 「その後、私は見た」とは、時間の流れを示す言葉である。

(2) 招きの言葉がかかった。

① 一つの開いた門があった。ヨハネには、天の情景を目撃することが許された。

② 「ここに上れ」「この後、必ず起こることをあなたに示そう」

\*ラツパのような声は、黙1:10の声と同じ、つまりキリストの声である。

(3) 「必ず起こる事」

① 未来の出来事に関する預言でもある。4章からが「必ず起こる事」

② 歴史に対して神が持つておられる目的が必ず成就するという意味でもある。

#### 2. 天の御座(2~3節)

Rev4:2 たちまち私は御霊に感じた。すると見よ、天に一つの御座があり、その御座に着いている方があり、

Rev4:3 その方は、碧玉や赤めのうのように見え、その御座の回りには、緑玉のように見える虹があった。

(1) 「私は御霊に感じた」「I was in the Spirit」聖霊の内であってヨハネの霊が天に上げられた。

① パトモス島にいつつ、霊が天に上げられるというヨハネの個人的な体験。 ※チャート参照

\*携挙ではない。

② 一つの御座と、その御座に着いている方とは、神の絶対的な権威を示している。

(2) 御座に着いている方は、碧玉(ジャスパー)や赤めのう(ルビー)のように見えた。

① シャカイナグローリーを言葉で描写するのは不可能なので、宝石を用いて情景を描写した。

(3) 碧玉と赤めのう ※チャート参照

① 大祭司が胸に着ける12の石の最初が赤めのう、最後が碧玉である。 出28:17~21

② ツロの王(墮落前のサタン)は、神の国、エデンにいた。

\*そこには、赤めのうと碧玉があった。 エゼ28:13

③ 新しいエルサレムの城壁の土台石となる。 黙21:19~20

(4) 御座は、エメラルド色(緑玉)の虹で囲まれていた。

① 御座に着いている方は、父なる神である。

3. 24人の長老たち(4節)

Rev4:4 また、御座の回りに二十四の座があった。これらの座には、白い衣を着て、金の冠を頭にかぶった二十四人の長老たちがすわっていた。 ※チャート①参照

- (1) 中心になる御座の回りに、より小さな24の御座があり、24人の長老たちが座っていた。
- (2) 24人の長老たちとは誰か。これをどう解釈するかで、その人の終末論が決まって来る。
  - ① 私たちは、24人の長老たちは携挙された教会(普遍的教会)であると解釈する。
  - ② これは、患難期前携挙説の立場である。
- (3) 彼らは、罪赦された聖徒たちが着る義の衣を着ていた。 ※チャート②参照
  - ① 彼らは天使的な存在ではなく、信仰による義人たちである。
- (4) 彼らは、金の冠「ステファノス」を頭にかぶっていた。勝利者に与えられる冠である。
  - ① 支配者の冠は、「ダイヤモンド」である。1
  - ② 冠は、長老たちが褒賞のための裁きを受けたことを示している。
  - ③ 褒賞のための裁きを受けるのは、聖徒たちだけである。
- (5) 長老という言葉が天使を指す用例ではない。地域教会のリーダーである。
- (6) 24人という人数は、教会全体を指す象徴的数字である。
  - ① ダビデは、レビ人を24の組に分けた。 I歴24:3~5  
\*信者は「祭司の王国」(黙1:6)である。人間でなければ祭司になれない。
  - ② 黙2~3章は地上の教会、黙4~5章は天における普遍的教会を描写している。
  - ③ 黙3:10の約束が成就している(フィラデルフィア「兄弟愛」の教会への約束)

Rev3:10 あなたが、わたしの忍耐について言ったことばを守ったから、わたしも、地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時※には、あなたを守ろう。 ※「には」でなく「から」と訳するのが妥当。

4. 7つの御霊(5節)

Rev4:5 御座からいなずまと声と雷鳴が起こった。七つのともしびが御座の前で燃えていた。神の七つの御霊である。

- (1) 感動的な天の情景が、さらに目を見張るものとなった。 ※チャート①参照
  - ① 雷鳴は、黙示録で8回登場する。神の裁きが地上に下ろうとしていることを暗示している。
- (2) 7つのランプ(神の7つの御霊)が燃えていた。7つの御霊を象徴している。黙1:4参照  
※チャート②参照
- (3) ここまで、父なる神と聖霊なる神が紹介された。
  - ① 黙5章でキリストが「ほふられたと見える小羊」として登場する舞台が整った。

5. 4つの生き物(6~8節)

Rev4:6 御座の前は、水晶に似たガラスの海のようであった。御座の中央と御座の回りに、前も後ろも目で満ちた四つの生き物がいた。

Rev4:7 第一の生き物は、獅子のようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空飛ぶ鷲のようであった。 ※チャート①参照

(1) 御座の前の床は、水晶に似たガラスの海であった。 ※チャート②参照

①神が聖であることを示していると考えられる。

②モーセがシナイ山で見た情景と似ている。

Exo24:10b 御足の下にはサファイヤを敷いたようなものがあり、透き通っていて青空のようであった。

(2) 御座のそばと回りの4つの生き物は、四福音が描くキリストの姿と符合する。

①獅子のような生き物は、マタイの福音書が描くキリスト。ユダの獅子。

②雄牛のような生き物は、マルコの福音書が描くキリスト。【主】のしもべ。

③人間のような生き物は、ルカの福音書が描くキリスト。受肉した人間。

④鷲のような生き物は、ヨハネの福音書が描くキリスト。神の子。

Rev4:8 この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、その回りも内側も目で満ちていた。彼らは、昼も夜も絶え間なく叫び続けた。/「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、今いまし、後に来られる方。」

(3) 4つの生き物は、天使たちである。

①イザ6:2~3に登場するセラフィムは、神をたたえていた。

Isa6:2 セラフィムがその上に立っていた。彼らはそれぞれ六つの翼があり、おのおのその二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでおり、

Isa6:3 互いに呼びかわして言っていた。/「聖なる、聖なる、聖なる、万軍の【主】。/その栄光は全治に満つ。」

②6つの翼、飛ぶ姿、礼拝の言葉などから判断して、これはセラフィムであろう。

③イザ6:2~3では、彼らの形状や顔、また数は、啓示されていなかった。

④ちなみに、翼を持った天使は例外的な存在である。

⑤エゼ10章の4つの顔を持つケルビムとも関連性があるように思える。

(4) 黙示録に14回の頌栄が登場するが、これが最初のものである。

①礼拝を受けているのは、父なる神である。

#### 6. 天での礼拝(9~11節)

Rev4:9 また、これらの生き物が、永遠に生きておられる、御座に着いている方に、栄光、誉れ、感謝をささげるとき、

Rev4:10 二十四人の長老は御座に着いている方の御前にひれ伏して、永遠に生きておられる方を拝み、自分の冠を御座の前に投げ出して言った。 ※チャート①参照

(1) 4つの生き物が捧げる礼拝に、24人の長老たちも参加した。

- ①これが2回目の頌栄である。
- ②礼拝を受けているのは、父なる神である。

(2) 自分の冠を御座の前に投げ出しているのは、礼拝の中に含まれる行為である。

- ①賛美と感謝は繰り返し捧げられている。
- ②彼らは繰り返し神に栄光を帰している。

Rev4:11 「主よ、われらの神よ、あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」

(3) 神は万物の創造主であり、それを支えている方であることを認め、告白している。

### IV. 結論

#### 1. 褒賞のための裁きとは

(1) ロマ 14 : 10

Rom14:10 それなのに、なぜ、あなたは自分の兄弟をさばくのですか。また、自分の兄弟を侮るのですか。私たちはみな、神のさばきの座に立つようになるのです。

(2) II コリ 5 : 10

II Co5:10 なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現れて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになるからです。

(3) I コリ 3 : 11~15

1Co3:11 というのは、だれでも、すでに据えられている土台のほかに、ほかの物を据えることはできないからです。その土台とはイエスキリストです。

1Co3:12 もし、だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、わらなどで建てるなら、

1Co3:13 各人の働きは明瞭になります。その日がそれを明らかにするのです。というのは、その日は火とともに現れ、この火とともに現れ、この火がその力で各人の働きの真価をためすからです。

1Co3:14 もしだれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。

1Co3:15 もしだれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、自分自身は、火の中をくぐるようにして助かります。

- ①信者のための褒賞の裁きは、「キリストの御座の裁き」である。 ※チャート①参照
- ②これは、携挙の後、大患難時代の前に、天において行われる。
- ③これは、救われているかどうかを判定する裁きではない。
- ④信者の行動や生き方が、評価・判定される褒賞のための裁きである。
- ・働きの清めの火によって試される。
  - ・燃える物(木、草、わら)と燃えない物(金、銀、宝石)がある。
  - ・燃えない物は不純物が焼かれてより精錬される。
  - ・燃える物で建てた人は、報酬を失うが、救いを失うことはない。
- ⑤24人の長老たち(普遍的教会)は、冠を受けて継続して神を礼拝していた。
- ⑥私たちも、普遍的教会の将来の運命を理解し、信じて今から継続した礼拝をはじめましょう！
- 誕生→教会時代(婚約)→携挙(出迎え)→報奨→婚姻→婚礼→メシアとの共同相続・統治**  
**→最終的な運命とは、永遠の御国・新しいエルサレムで、三位一体の神と永遠に住むこと。**

2. 教会の将来の運命を理解し、信じて、地上において今から継続した礼拝をはじめましょう！

- (1)「永遠の今」という視点で生きる。
- ・最終ゴール(新天新地・永遠の秩序)と今を結びつけて物事をとらえる。
- (2)「未来完了系」の信仰で生きる。
- ・神の約束は必ず成就するという信仰を前提に物事をとらえる。
- (3)「預言的未来」に生きる。
- ・神の恵みにより、必ず約束された未来に到達できるという希望を抱いて生きる。



Rev22:21 主イエスの恵みがすべての者とともにあるように。アーメン。  
～そして「聖書研究から日本の霊的覚醒(目覚め)が」ありますように～

モットー 「聖書研究から日本の霊的覚醒(目覚め)が」

・学びと行動の両輪

「教理」と「実践」という二面性は、「真理」と「愛」ということばで置き換えることができます。

「真理」(教理)と「愛」(実践)が調和した真のクリスチャン生活を、ともに目指しましょう!

聖書フォーラム運動の基本理念 「自立と共生」がキーワード。

・一人ひとりが、自立していること。

・お互いの個性を大切に、一緒に成長すること。

私たちのABC

・AIM … 聖書フォーラム運動の目的は、「神の栄光」を表し、求めること。

私たちは、この人生を通じ、神を誉め称えるために創られました。

・BASIS … 私たちの土台は、ユダヤ的視点により聖書を解釈すること。

当時の人たちが理解した方法で、聖書を字義通りに理解します。

・CONCEPT … 自主性を重んじ、経済的・精神的に自立した

お互い同士、小さなグループ同士が、ゆるやかにつながり合います。

自立への道

・教会の病理現象(FATIM)からの脱却

①形式主義(FORMALISM)から自由主義(FREEDOM)へ

1. キリストにある自由 2. 愛を働かせるための自由

②権威主義(AUTHORITARIANISM)から自治(AUTONOMY)へ

1. 自給伝道 2. 自主運営

③伝統主義(TRADITIONALISM)から変革(TRANSFORMATION)へ

1. ユダヤ的聖書解釈 2. 神の国の視点

④内向き志向(INWARD-LOOKING)から外向き志向(OUTWARD-LOOKING)へ

1. キリスト教を世界観としてとらえる。 2. キリスト教を歴史観としてとらえる。

⑤会員志向(MEMBERSHIP-ORIENTED)から流動志向(MIGRATION-ORIENTED)へ

1. 歴史の流れと社会の現状を読む。 2. 自らの動機の再確認。

学んだことをわかちあってください。そしてともに伝道しましょう。



聖書フォーラム  
BIBLE FORUM